

「東京ベイエリアビジョン」(仮称)の検討に係る官民連携チーム会議(第1回)

日時：平成30年10月18日(木)13時30分～14時10分

場所：都庁第一本庁舎 7階大会議室

【宮澤部長】 ただいまから、第1回「東京ベイエリアビジョン」(仮称)の検討に係る官民連携チーム会議を開会いたします。

皆様、本日はお忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。進行役を務めさせていただきます、政策企画局計画部長の宮澤でございます。よろしくお願いいたします。

本日の次第及び会議資料は、お手元でございますタブレットの中に入っております。タブレット内の資料は、自動的に説明時に動くようになってございますので、よろしくお願いいたします。

それでは、開会に当たりまして、小池知事より一言ご挨拶を申し上げます。知事、よろしくお願いいたします。

【小池知事】 皆様、こんにちは。都知事の小池百合子でございます。本日は、「東京ベイエリアビジョン」(仮称)の検討に係る官民連携チーム、何かお堅い名前になりましたけれども、そのキックオフでございます。千葉大学大学院の村木先生をはじめ、さまざまな分野の第一線でご活躍の皆様方にお集まりいただきました。誠にありがとうございます。

ちなみに、東京のベイエリアでありますけれども、全体像について、全体を俯瞰した総合的なビジョンを描くのは、何と17年ぶりのことになります。2001年、平成13年以来、全体のビジョンという、点はあったかもしれないけれども、面としてのビジョンが、これまで総合的に語られることがなかったという状況でございます。その意味で、今回のプロジェクトは極めてフューチャーリングというか、未来を見据えた、そしてまた、大きな観点で捉える、そのような絵を、皆様方からのご意見を伺いながら描いていきたいと考えております。

都庁からも、若手職員がメンバーに加わっております。これからも都政を担っていく若手の職員の皆さんにこのプロジェクトに関わってもらって、そして、やはり将来の東京も見据えた絵を皆様方とともに描いていくという発想でございます。また、組織の枠を超え

て、新進気鋭の皆様方から大いに刺激をいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

それから、ビジョン策定までの間は、行政、民間それぞれのバックグラウンドをフルに活用していただいて、そしてまた一方で、自由な発想で活発なご議論をいただければと考えております。

言うまでもございませんけれども、東京のベイエリアは、東京の発展とともに、これまでもダイナミックな動きを続けてまいりました。東京港の前身である江戸湊に始まって、今日では国際都市・東京の玄関口として、また、東京の魅力と活力を高める拠点として欠かすことのできない存在になってございます。1週間前には、豊洲に新市場もオープンいたしまして、東京のベイエリアにまた新しい1ページが加わったところでございます。

そして、これを忘れてはいけません。次、2020年のオリンピック・パラリンピックが控えておりまして、このベイエリアには多くの競技施設がございまして、今、まさしく建設など、準備を進めているところでございます。また、晴海には大きな選手村ができることになっておりまして、こちらのほうも、今建設が進められているところでございます。つまり、これからも、このベイエリアというのは大きく発展をする魅力を大いに秘めたところでございますので、是非とも皆様方に活発にご議論いただき、ビジョンを描いていきたいと思っております。

それから、タイムラインで申し上げますと、2025年には、いわゆるベビーブーマーの皆さんが後期高齢者を迎えるという紛れもない事実が控えているわけでございます。よって、これからも東京が持続可能な東京であり続けるためにも、どうやって東京の魅力をもっと大きくし、そしてまた、東京が持続可能であり続けるためには、このベイエリアをどう生かしていくのか、経済、社会、さまざまな分野の切り口でご議論いただきたいと思っております。

長々となりましたけれども、どうぞ皆様方の知識、ご経験、そして夢、豊かな発想を生かしていただいて、すばらしいビジョンづくりにご協力を賜ればと思います。どうぞよろしく願いいたします。

【宮澤部長】 知事、ありがとうございました。

続きまして、本日ご出席のメンバーの皆様をご紹介いたします。お名前を読み上げられましたら、ご着席のままで結構でございますので、一言ずつご挨拶を頂戴できればと存じます。

それでは、初めに、官民連携チームを統括するコーディネーターをお務めいただきます、千葉大学大学院工学研究院教授、村木美貴様。

【村木美貴様】 皆さん、こんにちは。千葉大学の村木でございます。専門は都市計画です。どうぞよろしく願いいたします。

【宮澤部長】 ありがとうございます。

続きまして、魅力あるまちづくりワーキンググループのメンバーでございます。東京大学大学院工学系研究科准教授、中島直人様。

【中島直人様】 皆さん、こんにちは。東京大学の中島でございます。私は、専門は都市計画ですけれども、特に都市デザインを専門としております。どうぞよろしく願いいたします。

【宮澤部長】 続きまして、開発プランナーの皆様でございます。三井不動産株式会社、佐藤堅志郎様。

【佐藤堅志郎様】 三井不動産の佐藤と申します。よろしく願いいたします。今まではオフィスビル、商業施設などの開発に携わっていて、今は市街地再開発を担当しております。よろしく願いいたします。

【宮澤部長】 続きまして、三菱地所株式会社、毛井意子様。

【毛井意子様】 三菱地所の毛井と申します。大変光栄な機会をいただきました。貴重な機会だと思いますので、しっかり議論に貢献できるよう頑張っていきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

【宮澤部長】 続きまして、森ビル株式会社、赤堀泰郎様。

【赤堀泰郎様】 森ビルの赤堀と申します。これまでは都心の、特に大型の複合の再開発を中心に経験してきております。色々な経験を生かして、皆さんとも協力しながら、是非貢献したいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

【宮澤部長】 続きまして、都庁若手職員でございます。

続きまして、活力と躍動感のあるまちワーキンググループのメンバーでございます。首都大学東京大学院都市環境科学研究科准教授、岡村祐様。

【岡村祐様】 皆さん、こんにちは。首都大学東京の岡村と申します。専門は都市計画と観光まちづくりをやっております。どうぞよろしく願いいたします。

【宮澤部長】 続きまして、アートディレクター、株式会社 goen^o 主宰、森本千絵様。

【森本千絵様】 皆様、こんにちは。初めまして。アートディレクターをしております。

本来は広告であったり、デザインが主なんですけれども、最近、保育園から墓場まで、アートディレクターの色々な活動の中で幅広さを感じております。コミュニケーションデザインを中心として、にぎわいあるデザイン、子供から老人までの思いで考えて参加させていただけたらと思います。よろしくお願ひいたします。

【宮澤部長】　　続きます、アンスティチュ・フランセ日本メディア&音楽担当、シリル・コピーニ様。

【シリル・コピーニ様】　　皆さん、こんにちは。アンスティチュ・フランセというのは、在日フランス大使館に所属している文化センターでございます。私の専門は、幅広く申し上げますとエンターテインメントでございます。日本では、フランスの文化を紹介するお仕事、それから、日本の文化を、主にフランスでございますが、海外で紹介する仕事でございます。自らもフランス人落語パフォーマーとして色々なところで活動しております。今回は、参加させていただきまして、誠にありがとうございます。

【宮澤部長】　　続きます、地方創生イノベータープラットフォーム INSPIRE 代表理事、ビジネス・ブレイクスルー大学経営学部グローバル経営学科学科長・教授、谷中修吾様。

【谷中修吾様】　　こんにちは。谷中修吾と申します。専門は、まちづくりのイノベーションです。日本中のまちづくりのイノベーターを北から南まで東ねておまして、突き抜けたアイデアで街を面白くする集合知をお届けできるようにと思っています。バイエリアビジョンでも、エクストリームなアイデア、突き抜けたアイデアをインプットできるようにお力添えできたらと思っています。よろしくお願ひします。

【宮澤部長】　　続きます、都庁若手職員でございます。

続きます、最先端技術のまちワーキンググループのメンバーでございます。東京大学大学院工学系研究科特任准教授、松尾豊様。

【松尾豊様】　　東京大学の松尾と申します。専門は人工知能、AIです。最先端の技術を使って東京の魅力をさらに上げるということ、是非提案できればと思っています。よろしくお願ひします。

【宮澤部長】　　続きます、メディアアーティスト、落合陽一様。

【落合陽一様】　　落合陽一です。最近肩書きがいっぱいあり過ぎて、メディアアーティストで統一しているんですけれども、ふだんは筑波大学の学長補佐と准教授、あと、自分の会社の代表取締役をしています。ほかにはVRとか業界団体の理事なんかをやっていますが、今日はマンマシンインターフェースとテクノロジーを使ったアートをどうやって考え

ていくかみたいなのが言えたらいいかなと思います。

【宮澤部長】 ありがとうございます。続きまして、株式会社 Hub Tokyo 代表取締役、榎屋詩野様。

【榎屋詩野様】 ご紹介ありがとうございます。株式会社 Hub Tokyo の榎屋です。ふだんはイノベーションハブ施設、Impact HUB Tokyo というのを目黒のほうでやっております、ほかの街、東京以外の地域でも、色々な形でイノベーションハブ施設を創ったりとか、人材育成をするのをお手伝いしています。全然最先端技術と関係ない仕事をしているので、ワーキンググループに、これでいいのかずっと悩んでいるんですけども、実は佃、月島地域に 20 年間小さいころから住んでおりましたので、バイエリアの住人ということで、今は住んでいないんですけども、家族はみんな住んでいますので、これで不動産価値を上げる形にさせていただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

【宮澤部長】 ありがとうございます。続きまして、都庁若手職員でございます。

メンバーの皆様、ありがとうございました。

なお、本日は、建築家の田根剛様、住友不動産株式会社の側嶋秀明様、株式会社プリファード・ネットワークスの西川徹様につきましては、所用によりご欠席の旨、あらかじめご連絡を頂戴しております。

では、続きまして、ワーキンググループの座長を選任いたします。座長につきましては、皆様に事前にご相談させていただきましたとおり、魅力あるまちづくりワーキンググループにつきましては、東京大学大学院准教授の中島直人様、活力と躍動感のあるまちワーキンググループについては、首都大学東京大学院准教授の岡村祐様、最先端技術のまちワーキンググループについては、東京大学大学院特任准教授の松尾豊様をお願いしたいと思います。何とぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、恐れ入りますが、小池知事は公務のため、ここで退席をさせていただきます。

【小池知事】 どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

【宮澤部長】 それでは、続きまして、お手元の次第に従いまして、「東京バイエリアビジョン」(仮称)の策定に向けた関係資料につきまして、事務局よりご説明をさせていただきます。

【伊東課長】 資料 3 をご覧ください。政策企画局計画担当課長の伊東でございます。

まず、「東京バイエリアビジョン」(仮称)の策定に向けた基本コンセプトでございます。1 点目としまして、東京、日本の今後の成長を創り出す場所として、東京バイエリアを世

界に発信する。これはライフ、ビジネス、エンターテインメントが融合した世界でも最先端のまちづくりや、東京 2020 大会を起点とした成長戦略による新たな産業、投資の呼び込み、また、人生が豊かになる場所としての発展を目指すものでございます。

2 点目としまして、東京ベイエリアを鳥の目で俯瞰し、各地域の特色をより生かす。これは築地、晴海、有明、青海地区など、各エリアの特徴を踏まえたビジョンを明らかにすること、また、臨海地域全体を総合的に捉え、交通網の整備をはじめ各エリアが有機的に連携できる姿を新たに描き出すことを目指すものでございます。

3 点目としまして、官民連携のもと、次世代を担う若手の視点や自由な発想を生かす。今回の官民連携チームの設置が、まさにここに当たるものでございます。

次に、「東京ベイエリアビジョン」（仮称）で対象とする地域についてです。このエリアは、港湾機能のほか、国内及び国際空港機能、また、新幹線や 2027 年開業予定のリニア中央新幹線の拠点駅、品川にも隣接し、陸海空の結節点、いわば東京の玄関口に位置しております。「東京ベイエリアビジョン」（仮称）では、このエリアにおける 2040 年代の将来像と、2020 年以降に取り組むべき成長戦略を明らかにすることとしております。

次に、官民連携チームについてです。チームは行政の枠を超えた自由な発想のもと検討を進めていただき、ビジョンを策定する庁内検討委員会に提案を行っていただきます。チームの体制としましては、検討を総括する総括会議と 3 つのワーキンググループから構成されております。総括会議はコーディネーターと 3 つのワーキンググループの各座長である 3 名の若手有識者の方々に構成され、チーム全体としての提案、取りまとめなど、総合調整機能を担います。

3 つのワーキンググループについてですが、1 点目、魅力あるまちづくりワーキンググループでは、将来のベイエリアに必要となる機能など、主にまちづくりのハード面からの検討を行っていただきます。2 点目、活力と躍動感のあるまちワーキンググループでは、文化、スポーツ、観光など、主ににぎわいを創出するソフト面からの検討を行っていただきます。また、3 点目の最先端技術のまちワーキンググループでは、ICT や AI など、今後の東京に大きなインパクトを与える技術面からの検討を行っていただきます。

最後に、検討スケジュールです。ビジョンの公表は平成 31 年末を予定しております。官民連携チームにおかれましては、ビジョンの庁内検討と並行し、複数回の提案を行っていただく予定です。設置要綱につきましては、お手元の資料 2 にお示ししておりますので、後ほどご参照いただければと存じます。

なお、参考までですが、最終ページにビジョン策定に向けた庁内の検討委員会、庁内ワーキンググループの体制をつけさせていただいております。

以上で説明を終わります。

【宮澤部長】 続きます、これまでのベイエリアの変遷につきまして、事務局よりご説明申し上げます。

【伊藤課長】 港湾局企画担当課長の伊藤と申します。私からは、資料4のこれまでのベイエリアの変遷について説明させていただきます。

それでは、次の埋立地の変遷から説明をさせていただきます。東京港の埋め立てにつきましては、古くは江戸時代から行われておりましたが、現在のような計画的な埋立造成は明治30年代から始まったものでございます。現在まで約5,800ヘクタールが造成されておりまして、これは東京ドームで言いますと、約1,200個分ということで、非常に広大な土地を埋め立てているというところでございます。

昭和に入りまして、30年代にはエネルギー基地ですとか、都市化に伴う事業者移転先、廃棄物処分場としての用途として埋立需要が高まりまして、急ピッチで埋立造成が進められてきたところでございます。昭和40から50年代に入りますと、国際貿易港としての機能の充実を図るために、品川、大井地区の埋立造成を進め、コンテナ埠頭や倉庫などの物流関係用地として活用されてきたところでございます。昭和60年代には廃棄物の処分が都市問題として深刻化してまいりまして、この解決のために、中央防波堤の内側、外側ですとか、羽田沖に廃棄物処分場の建設が決定されまして、埋立造成が進められてきたところでございます。さらに、東京の都市構造の一点集中型から多心型への転換を図ることになり、臨海副都心の開発等が進んできているところでございます。

続きます、臨海地域の変遷ということで、こちら、写真で変遷を示しているところでございます。

まず、昭和30年代からなんですけれども、左側の夢の島地区でございまして、もともと潮見に続く廃棄物の処理場としてごみの受け入れを行うところで、こちらの写真となっております。次に、真ん中ほどでございまして、新木場につきましては、江東区ですとか墨田区に立地しておりました木材関連企業の集団移転用地として計画されてきたところでございます。そして、右側の豊洲でございまして、日本経済の復興に大きな役割を果たすエネルギー関連の基地といたしまして、石炭ですとか、ガス、鉄鋼、電力などの専門埠頭として利用されてきたところでございます。

その下の段でございますが、昭和 40 から 50 年代には、品川、大井のコンテナ埠頭など、港湾施設が本格的に整備をされておりまして、引き続き青海コンテナ埠頭の整備が進められてきたところでございます。

その下の、現在のところでございますが、ご存じのように臨海副都心ですとか、豊洲ですとかいった地区などは、港湾機能の移転などによりまして、現在都市的利用が進んでいるという状況でございます。

それでは、続いてのスライドでございますけれども、臨海地域の現況と土地利用というところで説明をさせていただきます。現在の臨海地域の土地利用の状況を、図のように色分けをして示しているところでございます。

まず、黄色の地域でございますが、港湾機能の沖合展開などによりまして、住宅、商業、業務などの都市的利用可能な地域といたしまして、開発や発展のポテンシャルを有している地域でございます。青色の地域につきましては、大都市の産業活動や住民生活に必要な物資の流通を担う港湾施設が立地する港湾エリアとなっているところでございます。続いて、グレーの地域でございますが、港湾機能と一体的に利用される倉庫ですとか、産業関連施設が立地している地域でございます。続いて、茶色の地域でございますが、こちらは廃棄物処分場として利用されておりまして、現在は中央防波堤の外側ですとか、新海面処分場におきまして、ごみの受け入れを行っているところでございます。緑色の地域でございますが、緑地や公園として利用されているところでございまして、夢の島ですとか、若洲ですとか、海の森というところにつきましては、もともと廃棄物処分場として整備されてきたところでございますが、その廃棄物処分場としての役割を終えまして、現在は海上公園として、都民が海や自然と触れ合い、スポーツやレクリエーションを楽しめる場所となっているところでございます。

さらに、東京 2020 大会を控えまして、臨海地域には、競技会場ですとか選手村等のオリパラ関連施設が配置されまして、施設整備が進んでいるところでございます。

それでは、続いての資料でございますが、臨海部のまちづくりというところで、臨海副都心の主な経緯を年表等で示している資料でございます。

まず、臨海部のまちづくりににつきましては、国際化や情報化の進展によりまして、業務機能が都心部に集中し、都市問題が深刻化いたしました 1980 年代が始まりとなっているところでございます。こうした都市問題に対応するために、1985 年、昭和 60 年に第二次東京都長期計画を策定いたしまして、都心部への一点集中による用地不足や地価高騰などへ

の対策といたしまして、多心型都市構造への転換を推進することとし、臨海部は第7番目の副都心として開発をスタートすることになりました。さらに、この長期計画に基づく具体的な事業化に向けまして、1989年、平成元年に臨海副都心開発事業化計画を策定いたしました。その後、レインボーブリッジ、ゆりかもめ、りんかい線などの交通基盤が整い、東京ビッグサイトですとか、フジテレビなどが開業いたしました。バブル経済の崩壊によりまして、進出予定者の撤退など、臨海副都心を巡る状況が大きく変化したところでございます。

このため、既定計画を見直すこととなりまして、臨海部全体を視野に入れた臨海副都心開発計画の方針、事業内容、事業手法などを集約した事業実施の基本となる臨海副都心まちづくり推進計画を、1997年、平成9年に策定したところでございます。その後、りんかい線ですとか、ゆりかもめの延伸、また、晴海通りの延伸が完了いたしまして、交通アクセスの充実が図られたところでございます。また、有明南地区の街が概成、青海地区のまちづくりが進展する中、2013年、平成25年に東京2020大会の開催が決定いたしまして、臨海部に多くの競技会場が計画されることとなりました。

これらの状況を踏まえ、昨年度、2040年代の東京の目指すべき都市の姿と、その実現に向けた都市づくりの基本的な方針などを示しました都市づくりのグランドデザインを策定いたしました。この中で、臨海部につきましては、東京2020大会のレガシーを生かすことや、水辺の立地を生かして個性のあるまちづくりを目指すこととしております。

【田中課長】　　続きまして、ここからは、都市整備局開発計画推進担当課長の田中がご説明をさせていただきます。

こちらで、ベイエリアのこれまでのまちづくりについて、これまでに東京都が策定したまちづくりの方針や計画をお示しさせていただいております。先ほどご説明のあった臨海副都心まちづくり推進計画の対象範囲は、台場、有明などのピンクで囲った地区になっております。そのほか、豊洲市場のある豊洲地区、選手村のある晴海においては、豊洲・晴海開発整備計画、造船所跡地である豊洲1から3丁目においては、まちづくり基本方針を策定し、これまでまちづくりを進めてきたところでございます。

また、図の下のほうになりますが、羽田空港の南側の空港跡地においては、国や地元区とともに羽田空港跡地まちづくり推進計画を策定し、具体的な計画を進めているところでございます。ベイエリアでは、水と緑に関する取り組みも進めているところであり、関係する計画として、都市計画公園・緑地の整備方針や、運河ルネサンス、海上公園ビジョン

などがございます。

続いて、昨年9月に策定した都市づくりのグランドデザインについてでございます。以前の都市づくりビジョンにおいては、臨海部を独立したゾーンとして位置づけておりました。しかし、これまでに臨海部の交通基盤が整備されて区部中心部と強く結ばれたことや、都市機能の集積が進んだことなどを踏まえて、今回策定したグランドデザインにおいては、区部中心部と一体的に発展し、日本及び東京圏の経済成長をリードするゾーンとして位置づけております。

続いて、ベイエリアに関して、グランドデザインの中で触れている具体的な取り組み方針についてご説明いたします。1つは、東京2020年大会の競技施設をさまざまな角度から生かすということで、周辺のまちと連携して、にぎわいの創出につながるレガシーを形成していくということでございます。もう1つは、ベイエリアの特性である水辺を生かした都市空間を創出し、多くの人でにぎわう水の都を再生するというので、水辺に顔を向けたまちづくりや、観光や身近な移動としての船旅を定着させるといった取り組みでございます。

こうした取り組みを展開して、東京全体の機能向上、魅力向上に資するベイエリアのまちづくりを進めていきたいと考えているところでございます。

以上で、これまでのベイエリアの変遷についてのご説明とさせていただきます。

【宮澤部長】 事務局からの説明は以上でございます。ここまでのところで、何かご質問、ご確認事項などございますでしょうか。

【落合陽一様】 ベイエリアって何区なんですか。区の区分が知りたいんですけども、それ、資料どこかに載っていたりしますか？

【事務局：宮崎港湾局開発企画課長】 ベイエリアにつきましては、先ほどイメージ図でお示したところでございますが、行政区につきましては、中央区、港区、江東区、品川区、大田区、それから、江戸川区ということで、6区を想定しているところでございます。

【落合陽一様】 なるほど。ありがとうございます。

【宮澤部長】 ありがとうございます。そのほか、何かございますでしょうか。

どうぞ。

【中島直人様】 埋立地の変遷のご説明をいただいて、まさにこの地域の特徴は、どんどん造られていくということだと思うんですが、このビジョンを2040年ぐらいを目途に考

えるとしたときに、この後の20年の間に、例えば⑦の処分場とかは全部埋まりきるのか、それともまた別のところに何かごみ処理として必要になってくるのかとか、将来に向けて、少し埋め立ての展望というか、そういうのを教えていただければと思うんですが。

【宮澤部長】 ありがとうございます。

【事務局：宮崎港湾局開発企画課長】 埋め立ての計画でございますが、現状は、先ほどお示ししたとおり、中央防波堤外側のところに、さらに新海面処分場として今建設を進めているところでございますが、2040年代には、まだ廃棄物処分場として造成を続けている最中でございますので、平たく言いますと、ごみで埋まることはないと考えてございます。

【中島直人様】 分かりました。

【宮澤部長】 ありがとうございます。ほかに何かございますでしょうか。

どうぞ、お願いします。

【松尾豊様】 今映っているスライドで、都市エリア、港湾エリア等々分かれていますけれども、これは要するに、埋め立てが進んでくるにつれてというか、時代がたつにつれて、都市エリアがもうちょっと海側に進出してくるイメージでいいのでしょうか。

【事務局：宮崎港湾局開発企画課長】 今ご指摘いただきましたように、こちらの色分けについては現在の色分けでございまして、先ほど、例えば豊洲の部分については、以前は石炭の基地ということでございましたが、港湾機能が沖合に展開すること、図でいきますと南側、下側に展開することによって、色合いが徐々に変遷しているというところでございますので、これはあくまでも現在のイメージとして捉えていただければと存じます。

【松尾座長】 ありがとうございます。

【宮澤部長】 ありがとうございます。そのほか、いかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

それでは、今後の予定でございます。今後の会議の予定につきましては、また改めまして、各ワーキンググループごとの議論を踏まえて日程を調整させていただきます。

それでは、以上をもちまして、第1回「東京ベイエリアビジョン」（仮称）の検討に係る官民連携チーム会議を終了いたします。

本日の会議資料、議事要旨につきましては、後日ホームページ上に公開をさせていただきます。

なお、報道機関の皆様への公開はここまでとさせていただきます。

メンバーの皆様は、これより先ほどお集まりいただきました中会議室に移動していただきまして、各ワーキンググループごとに分かれてミーティングを行っていただきます。おむね14時40分ぐらいになりましたら、事務局のご案内いたしますので、バイエリアの視察のために都庁をバスで出発いたしますので、よろしく願いいたします。

それでは、これもちまして、終了いたします。どうもありがとうございました。

— 了 —